

略語の問題

諏訪 功

はじめに

Heinz Koblichke は、その編集にかかる略語辞典 (Abkürzungsbuch, Leipzig 1969) の序文で、ドイツ語において普及し、程度の差こそあれひろく用いられている略語の数を、すくなくとも 5 万から 6 万と推定できると言っている。この数字は他の研究者が挙げている数字とかならずしも一致していない。ある研究者はこの数字よりも多い、また他の研究者はこれよりも少ない数字を挙げているのである。しかしこの不一致は本質的なものではない。ある略語を確立したものであるか否か判定するのは往々にして困難であり、その判断の如何によって、数字は大きく動いてくるからである。どのような語でも短縮できる、そしてそのやり方が場合場合に依って多種多様でありうるのは、Koblichke も指摘している通りであり、たとえば次の新聞広告に見える省略形を確立したものであるか否か判断するに従って、数字は動く： Jung. Kaufmann sucht z. 1. 9. möbl. Einzelzimmer m. Bad in gut. Lage m. halb. Pension, Angeb. unt. A 24 166. (= Junger Kaufmann sucht zum 1. 9. möbliertes Einzelzimmer in guter Lage mit halber Pension. Angebot unter A 24 166)。数字の不一致が示しているように、たしかにこの辺の判断はむずかしい。しかしわれわれは Koblichke に従って、上例のような略語、すなわちその時々に応じて作られる、個別的な、情況に縛られた省略形は度外視し、Koblichke がその略語辞典に採用している種類の略語（彼はその各々に省略されない元来の形を挙げ、必要に応じて解説も加えている）に、われわれの考察を限ることにしよう。それでもその数は約 2 万にのぼる。日本で出版されている数多くの独和辞典の収録語数が通常 10 万を越えないことを考え合わせると、この 2 万という数字はやはり多いと言わなければならないの

である。

この小論の目的は、このおびただしい数にのぼる略語をある程度整理し、現代ドイツ語において果たしているその役割について、いささかの考察を加えることにあるが、本題に移る前にいろいろと断っておかなければならないこともあり、ある程度の予備的考察の必要もある。

まず、単に表記上の省略であって、読まれる場合には省略されないもとの形に還元される略語がある。さきほど挙げた新聞広告中の省略形もこの部類に属するが、略語として確立しているものの中にも同様のものがある。たとえば Dr. (=Doktor), z. B. (=zum Beispiel) などの略語は、通常その完全形に引き直して発音され、[de:'ɛr], [tset'be:] と発音されることはない。これに対して通常、省略形のまま発音される略語がある（この発音の仕方のちがいについては後述する）。もちろんこの二通りのあつかいの境界は、時として流動的であるし、組み合わせられて出てくこともある。たとえば Dr. habil. は doctor habilitatus と、Dr. phil. は doctor philosophiae と完全形に引き直して発音されることはなくて、通常は ['dɔktɔr ha'bi:l], ['dɔktɔr fi:l] と発音される。前半は単なる表記上の省略であり、後半はそのまま発音される略語、すなわち表記上も発音上も完全形と異なるあつかいを受ける本来の略語である。われわれは主として後者を考察の対象としよう。

語形の短縮は広い意味で造語論 (Wortbildungslehre) の対象となる問題である。しかしこの問題のドイツ語に即した通時的研究は、あまり進んでいないようである。研究者たちはこの問題をあつかう際、ふつう視野をドイツ語に限ることをせず、他の国語における同一の現象にも目を注いでいる。Paul Spillner がその論文 Probleme der Abkürzungen (Sprachforum 1, Düsseldorf 1956, S. 61) で述べているところによると、語形短縮は別にここ数十年の発明ではなく、すでにギリシャ・ローマ時代において行なわれていたということである。彼によればローマ時代に Tironische Noten とよばれる語形省略方式があった。1957年版の Der Grosse Brockhaus の記載によると、これは一種の速記術であつたらしい。Spillner はさらに、ヘブライ人たちが宗教的な理由から、Jehovah をもっぱら短縮形でよんだこと、またセネカが5千ほどの略語を蒐集したと伝えられていることなどを述べている。また Fritz Tschirch はその論文 Stehen wir in einer Zeit des Sprachverfalls? (Sprachnorm, Sprachpflege, Sprachkritik, Düsseldorf 1968, S. 125) において、いくつかのラテン語の略語、たとえば INRI (=Jesus Nazarenus Rex Judaeorum), AD (=Anno Domini), RIP (=Requiescat in pace) などに言及している。英語の歴史においても早くからいくつ

かの略語が用いられていたという記録がある。新英文法辞典（三省堂、1970年）の記載によると（556ページ）古い例としては、寄稿した5人の筆者の頭文字から作った筆名 *Smectymnuus* (=Stephan Marshall, Edmund Calamy, Thomas Young, Matthew Newcomen, William Spurstow) が1641年に、さらに同様の頭字語として1673年にチャールズ二世時代の外務委員会の名称 *Cabal* (*Clifford, Arlington, Buckingham, Ashley, Landerdale*) が見られるということである。この2つは現在おびたしい数にのぼっているいわゆるイニシャル語（9ページ参照）の先駆と見ることができる。話をドイツ語に限ると、略語に関するどの文献にも挙げられている例としては、俗語の *keß* がある。Paul-Betz のドイツ語辞典（Tübingen 1966）にはこの語に関して次のような説明がある：…… „dreist, schick“, ins Berlin. aus der Gaunersprache übernommen, wo es für ‚diebserfahren, zuverlässig‘ steht und ursprüngl. den Anfangsbuchstaben von jiddisch *chöchem* „klug“ bedeutet……. すなわちこの語も、元来はイニシャル語であった（9ページ参照）。Hugo Moser は語短縮の傾向はすでに18世紀において観察できると述べ（Maurer-Stroh, *Deutsche Wortgeschichte* II, S. 474 ff.），一例として当時、*Bewegungsgrund* から *Beweggrund* が作られたと言っている。これは *Klappwort* のひとつであろう（14ページ参照）。ひろい意味で語形短縮の部類に入る例として、いわゆる人名の短縮・愛称形を挙げることができる。これはかなり古い時代から行なわれていたと思われる。いくつか例を示すと：*Alex[ander]*, *Ben[jamin]*, *Friede[rike]*, *[Char]Lotte*, *[Alex]Sander*, *Gabi* (<*Gabriele*). しかしドイツ語において語形短縮の傾向が目立ち始め、略語の数が急増したのは今世紀に入って以来、とりわけ第二次世界大戦後のことである。技術文明のめざましい進展、それに伴う人間生活のあらゆる領域における変化は、さまざまな新しい事物、概念を生み出し、それを言語的にとらえることを要求している。ただし注意しなければならないことは、この過程における言語上の変化は、さしあたってドイツ語において俗に *Wortschlange*, または *Bandwurmörter* とよばれている、いくつかの語あるいは語群から成り立つ長大な語の発生であり、これが語形短縮の基礎となっていることである。この際ドイツ語の持つ特徴、すなわち名詞の複合能力がとくにあずかって力あることは疑えない。

事実ドイツ語では *Straßenverkehrssicherheitstag* 「道路交通安全日」とか、*Fahrpreisermäßigungsantragsformular* 「運賃割引申請用紙」とかいう長大な語が、格別の異和感なしに作られ、使われる。もちろん英語でも同様に表現できるし、場合によってはドイツ語では不可能な結合さえなしうるが、ドイツ語では複合名詞を構成する要

素をすべて一語にまとめて書いてしまう習慣のために、たとえば Mark Twain をよろこばせたという次のようなモンスターがたやすく生まれうるのである： Personal-einkommensteuerschätzungskommissionsmitgliedreisekostenrechnungsergänzungsrevisionsfonds「個人所得税評価委員会メンバー旅費勘定補助修正資金」。後で見るように、略語には2綴りから3綴りのものが多いが、その基礎、出発点として、このように多くの綴りから成る基礎語の存在が不可欠であることは言を俟たない。事実、Werner Reinhardt はその報告： Einige Probleme und Erscheinungen der Wortbildung in der deutschen Fachsprache der Technik und ihre Bedeutung für den Sprachunterricht の中で、一方では正確と詳細を求める傾向およびそこから生まれる語の長大化、他方ではさまざまな語形短縮の可能性を徹底的に利用する傾向およびそこから生まれる略語の問題、この2つが、技術の領域におけるドイツ語の造語法の本質的な傾向をなしていると言っているのである（Deutsch als Fremdsprache, 7. Jahrgang 3, Leipzig 1970, S. 210）。新しい概念をできるだけ正確に、省略なしに語として鑄造しようとする努力が先行し、その後語形短縮の過程が続く。長大化と短縮は相補的な関係に立っている。具体化がある極に達すると、そこで抽象化への急転が生ずるのである。

ところで略語を多用した文体は、規範的文体論（Normative Stilistik）、あるいは一般に保守的な文体論の立場をとる人びとから、あまりよく見られていないようである。たとえば Wustmann の Sprachdummheiten（13. Auflage, Berlin 1966, S. 375）には、次のような諷刺詩がのっている：

Ich frage Dich: Wer heißt denn so?

Wer Vorige, wer Ibiko

Und Rob, Rehabu, Habebro?

Was ist Ahag, Mühlbag, Ala?

Was Viag, Preußag, Habämfa?

Was Ambi, Adka, Darzuf Mifa?

Was Gagfah Edeka, Debewa?

Zu guter Letzt das neuste Nette,

Die preisgekrönte Debegette?

ここにあらわれている19の奇妙な略語を Koblischke の略語辞典で引いてみると、Preußag (= *Preußische Bergwerks-und Hütten AG*), Gagfah (*Gemeinnützige Akti-*

engesellschaft für Angestellten-Heimstätten), Edeka (=Einkaufsgenossenschaft[en] deutscher Kolonialwarenhändler), VIAG (=Vereinigte Industrie-Unternehmungen AG) の4つだけが説明されている。さらに Ala は Chem. Alanin という説明が与えられているが、他の略語がすべて会社名あるいはそれに類するものであることを考え合わせると、これもおそらく何か別のものなのであろう。さいごの Debegette はこの詩にすぐ続いて説明が加えられている。それによるとこれは *Deutsche Buchgemeinschaft* のイタリック部分のアルファベット読みをそのまま綴った、イニシャル語のひとつの変型であることがわかる (10 ページ参照)。しかし他の略語がいったい何を意味しているのか、どのような完全形の代りに立っているのか、答えられる人間はそう多くないと思う。ドイツ人にとってさえもそうであるのは、この諷刺詩の問いかけが証している。これらの略語はいわゆる意味的動機づけ (semantische Motivation) を完全に失った、一種の符牒と化してしまっているのである。もちろんこれらの例は、普遍性を持たない、特殊な略語であって、Koblichke の略語辞典に収録されるには適していない種類のものではある。しかしこの諷刺詩の投げかけている問いは、他のより広く用いられている略語についても当てはまる。そしてまた意味的動機づけの喪失のみならず、他にもいろいろな問題が浮かびあがってくるのである。われわれはまず、ドイツ語において普及し、程度の差こそあれひろく用いられている略語を、一定の規準に従って整理することから始めよう。

I

Bergstrøm-Nielsen は「ドイツ語において普及し、程度の差こそあれひろく用いられている略語」を、その造語法と発音に従って4つのタイプに分けている (*Die Kurzwörter im heutigen Deutsch*, Moderna Språk 46, 1952, S. 2-23)。彼の分類を次にかかげる：

タイプ	1	2	3	4
例	<i>AEG</i>	<i>Ufa</i>	<i>Auto</i>	<i>U-Boot</i>
造語法	Allgemeine Elektricitäts- Gesellschaft	Universum- Film-Aktien- gesellschaft	<i>Automobil</i>	<i>Untersee-Boot</i>
発音	[a:e'ge:]	[u:fa]	[auto:]	[u:bo:t]

Bergstrøm-Nielsen は略語を Abkürzungen と Kurzwörter とに分ける。彼によれ

は前者は単なる表記上の省略であり、読まれる時は完全形に引き直して発音される（たとえば d. h.=das heißt, usw.=und so weiter, z. B.=zum Beispiel）。これに反して後者すなわち Kurzwörter は略語としての形そのままに読まれる（たとえば AEG は [a:e'ge:] と、Hapag は ['hapak] と発音される）。しかしわれわれは彼の言う意味での Abkürzungen すなわち単なる表記上の省略によって生じた略語を、われわれの考察から一応除いておいた。こういった種類の略語もこの考察の後半においては問題となるが、さしあたっては Bergstrøm-Nielsen の言う意味での Kurzwörter に考察を限定することにする。

ところで前ページの表に例として挙げられているような略語全体に対する総称として、Kurzwörter という語を用いることは、いささか慣用に反する。ふつうは表のタイプ1とタイプ2とを Abkürzungen とよび、タイプ3のみを Kurzwörter とよぶ。なぜならばタイプ1とタイプ2においては、読み方のちがいを度外視すれば、いずれも複合語、または語群を構成するいくつかの要素の頭文字を組み合わせて作られた語という点で共通している、しかしタイプ3は、一語のいくつかの連続した綴りを残し、他の要素を切り捨てて作られた語という点で、タイプ1とタイプ2に対立するからである。さらにタイプ1とタイプ2とが主として最近に作られた略語であるのに対し、タイプ3はすでに人名の省略形においてみたように、古くから一般的になっていた語形短縮の手続きによって作り出された略語である。すなわち2つのグループは歴史的にも区別できるのである。われわれもこの Abkürzungen と Kurzwörter の区別を一応維持していこうと思う。

さらに表のタイプ3すなわち Kurzwörter は、どの部分が切り捨てられ、どの部分が残されるかによって、以下のような下位区分が可能である：① 語の前半だけが残される場合、いわゆる Kopfwörter；② 語の後半だけが残される場合、いわゆる Schwanzwörter；③ 中間が省略されて前後が残される場合、いわゆる Klappwörter、この3つである。可能性としては前後が省略されて中間だけが残される場合が考えられる。事実英語ではこの方式を用いて detective から tec を、influenza から flu を作り出すし、日本語でも大阪大学から阪大を作り出す。しかしドイツ語ではこの方式に従った略語は見つからないので、一応この可能性は度外視してもよいだろう。Bergstrøm-Nielsen の表を検討して残るのはタイプ4であるが、これはタイプ1に属する略語と他の品詞との結合の可能性のひとつと考えればよい。したがって次表のような新しい分類の可能性が生ずる：

タイプ	I (Abkürzungen)		II (Kurz Wörter)		
下位区分	a	b	a (Kopf-)	b (Schwanz-)	c (Klappwörter)
例	<i>AEG</i>	<i>Ufa</i>	<i>Auto</i>	<i>Bus</i>	<i>Krad</i>
造語法	Allgemeine Elektricitäts- Gesellschaft	Universum- Fillm-Aktien- gesellschaft	<i>Automobil</i>	<i>Autobus</i>	<i>Krafttrad</i>
発音	[a:e'ge:]	['u:fa]	['auto:]	[bus]	[kra:t]

タイプ I (Abkürzungen) について

このタイプに属する略語はいずれも複合語あるいは語群の各構成要素の頭字を組み合わせて作った、いわゆるイニシャル語である。タイプ Ia と Ib とのちがいは発音に存する。すなわちタイプ Ia に属する略語の場合、それを構成する字母がそれぞれアルファベット読みされるのに対し、タイプ Ib に属する略語はふつうの単語のように読まれるのである。さらにアクセントの上でも、タイプ Ia に属する略語は原則として最終綴りにアクセントを置いて読まれる（かならずそうであるというわけではない。以下の当該箇所参照）のに対し、タイプ Ib の略語はドイツ語の一般原則に従って、第一綴りにアクセントをおいて読まれる。さらに表記上の点に関しても、AEG と Ufa の対立によってもわかるように、タイプ Ia が略語の性格を表記上も保持しているのに対し、タイプ Ib はふつうの語のように書かれる（これにも例外はある）。S. V. Baum は英語の略語に関してタイプ Ia を abbreviation とよび、タイプ Ib を acronym とよんで区別している (American Speech, vol 47, New York 1962, S. 48)。しかし両者の区別は往々にして流動的であり、同一の略語が時に応じて二通りに読まれることも珍しくない。Baum が挙げている英語の例は軍隊の俗語 *absent without official leave* (無断欠勤) で、これは *awol* と略され [eiwo:l] と読まれる場合 (タイプ Ib) と、A. W. O. L. と略されアルファベット読みされる場合 (タイプ Ia) とがあるということである。タイプ Ia に属する略語は数えあげるときりが無い。たとえば DDT (=Dichlordiphenyltrichloräthan) のような長大な単一語、ZK (=Zentralkomitee) のような複合語、CDU/CSU (=Christlich-Demokratische Union/Christlich-Soziale Union) のような語群、さらには s. t. (=sine tempore) のような副詞句、ついには m. w. ! (machen wir!) のような文に至るまで、例は枚挙にいとまがない。国名、党名、社名などは3綴りのものが多く (たとえば: DDR=Deutsche Demokratische Republik; SPD=Sozialdemokratische Partei Deutschlands; BMW=Baye-

rische Motorenwerke), 他のものには2綴りのものが多い。UdSSR (=Union der Sozialistischen Sowjetrepubliken) などのように3つ以上の綴り数をもつものは数少ない。^(注1) タイプ Ia のヴァリエーションとして、個々の字母の発音を表記に反映した略語がある。Kadewe (=Kaufhaus des Westens) は K. d. W. という3つの字母の発音をそのまま表記に反映したもので、Edeka (=Einkaufsgenossenschaft[en] deutscher Kolonialwarenhändler) もこの部類に入る。さらに、ただひとつの字母から成り立つ略語も、このような表記法においては可能である。たとえば Zett がその一例で、これを Heinz Küpper は、「ドイツ語日常語小辞典」(Handliches Wörterbuch der deutschen Alltagssprache, Hamburg und Düsseldorf 1968) において、Zuchthaus あるいは Zuchthausstrafe の略語として説明している。またこのような表記法が商品名などの命名の基礎となることもある。いわゆる東ドイツ (DDR) において筆者の見かけた繊維名 Dederon は、すくなくとも最初の2綴りに関する限り、DD という字母の発音を表記に反映したことから来ているのであろう。こういう表記法をとることによって、タイプ Ia に属する略語はタイプ Ib に属する略語に近くなってくる。ということは略語の性質を捨てて、ふつうの語の性質を帯びてくるということで、この移行は表記法に限らず、いくつかの略語のアクセント位置の移動にもあらわれている。たとえば Duden の発音辞典 (Mannheim 1962) の 39 ページの記載によると、個々の字母がそのまま発音される略語にあっては、アクセントは最終綴りに置かれるという原則がある。例として挙げられているのは Lkw (=Lastkraftwagen) で、これは [ɛlka:'ve:] と読まれる。しかし Walter Jung によると (Grammatik der deutschen Gegenwartssprache, Leipzig 1967, S. 479), しばしば使われる略語においては、アクセントが最初の綴りに移ることがある。たとえば Lkw, Pkw はしばしば ['ɛlka:ve:], ['pe:ka:ve:] のように発音されるというのである。もちろん最終綴りにアクセントのある語は、ドイツ語においても数多いし、またすべての略語においてこのようなアクセントの移動が生じているわけでもない。しかし必要な留保をつけてではあるが、タイプ Ia に属するような略語を、ふつうの語彙に同化しようとする動きがあるというふうに言うことができるだろう。このアクセントの移動と個々の字母の発音を表記に反映することとが組み合わさって生まれた略語、たとえば Edeka などは、発音に関しても (この語は最初の綴りにアクセントを置いて ['e:deka] と発音される), また表記法に関してもタイプ Ib に属する略語、さらにはふつうの語と同じ性質を帯びてきているのである。

タイプ Ib に属する略語はとくに第二次大戦後、数多く作られている。この点に関

するドイツ語の文献は目にしていないが、英語に関しては、1933年以後、Rooseveltのニューディール政策に関連して生まれた数多くの略語が、大部分タイプ Ia に属するものであったのに対し、第二次大戦中および戦後に生まれた略語はほとんどタイプ Ib に属するものであるという指摘がある（上野景福、語形成、東京、1955年、92ページ）。同書では N. R. A., T. V. A., R. F. C. などと、UNESCO, LARA, GATT などが対比してある。ドイツ語の例としては、表にかかげた Ufa, Hapag のほかに、文を構成する要素のイニシャルから作られた珍しい例として、TUSMA (=Telefoniere, und Studenten machen alles. 学生団体の名称) を挙げておこう。

こういう略語に、意味上の動機づけを施すこともある。すなわちさまざまな字母の組合せから生ずる略語を、既存の他の語と接近させようとする場合である。TUSMA という略語も „Tu's mal!“ 「やっでごらん」という文と響きが似通っているが、何といてもいちばん知られているのは PEN-Club であろう。この複合名詞の前半部をなしている略語 PEN は、周知のごとく、Poets, Playwriters, Editors, Essaists and Novelists という英語の単語のイニシャルを組み合わせで作られているが、PEN は同時にこれらの職業に携わる人びとの道具でもある。PEN-Club という正字法と並んで、Pen-Club という正字法が一般に行なわれている。これは英語の表記法の反映ということのほかに、この語が元来は略語であるという意識が次第に失われつつあることの結果でもあろう。

タイプ Ib のヴァリエーションとして、個々の字母ではなく、まとまりのある綴りを組み合わせて作られた略語がある。Gestapo (=Geheime Staatspolizei), Leica (=Leitz-Camera) などの例を挙げておこう。AStA (=Allgemeiner Studentenaus-schuß) なども、二番目の構成要素において、st というドイツ語に多い子音結合をそのまま使っていて、このヴァリエーションの仲間に入れることができるだろう。

タイプ Ia とタイプ Ib に属する略語の変化、正字法、性などに関しては、なお多くの問題が残っている。しかしこれらについては Duden の正字法辞典などに記載があるので、ここではとりあげないことにしよう。とはいえ Bergström-Nielsen の表にかかげられている第4のタイプ、すなわち略語と他の品詞との結合および略語からの派生語については、少し考えてみる必要がある。

まず Die Welt の1970年6月3日付の紙面から拾った短い報道記事を読んでみよう：Der DGB-Vorstand und die SPD-Bundestagsfraktion haben am Montagabend Fragen der Wirtschafts- und Gesellschaftspolitik erörtert. この記事に出てくる、略語を含む2つの複合名詞は、もし略語を完全形に代えたとすれば、このままの結

合を保っていることはほぼ不可能であろう。試みに略語を完全形に代えてみると次のようになる：**der Deutscher Gewerkschaftsbund-Vorstand* および **Sozialdemokratische Partei Deutschlands-Bundestagsfraktion*。すなわち略語を含む複合名詞は、いくつかの完全形を結合して作る通常の複合名詞にくらべて、より自由な結合をなしているのである（この点に関しては Wolfgang Fleischer, *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*, Leipzig 1968. S. 213 を参照）。もっとも、ふつうの複合名詞にも、例外的に *die Rote-Kreuz-Schwester* とか *der Faule-Eier-Duft* などという結合があるにはある。しかしこれらの語が、とりわけ形容詞の語尾変化に関して、いささか不安定な感じを与える、つまりあくまでも例外的な結合の印象を与えるのに反し、*der DGB-Vorstand* や *die SPD-Bundestagsfraktion* はそのような印象を与えない。DGB や SPD はイニシャル語として、完全形の文法的諸性質から抜けてしまったために、他の品詞との結合の際に、より大きな自由を獲得しているのである。意味上の明確さと形の美しさを犠牲にして、たとえば *die Rote-Kreuz-Schwester* を *die RK-Schwester* と、*der Faule-Eier-Duft* を *der FE-Duft* としてみると、元来の形に附随していた不安定な感じは確かに消えるのである。

イニシャル語は完全形の文法的諸性質を大幅に捨てているため、派生という点に関しては生産的でない。ただ、ある団体を示す略語に *-er* または *-ler* という後綴りをつけて、その団員をあらわす派生の可能性がある。FDJ (= *Freie Deutsche Jugend*) から派生した *FDJler*、および *ATV* (= *Akademischer Turnverein*) から派生した *ATVer* がその例である。さらに Bergström-Nielsen は前掲論文の中で、文法上の性の転換による派生という面白い観察をしている。彼によると *der FHD* (*Schweizerischer Frauen-Hilfsdienst*) は団体を意味するが、*die FHD* はその団員を意味するそうである。ただし彼自身、この方式の普遍性は主張していない。

要約すると、タイプ Ia に属する略語は、アクセントの移動（たとえば [*elka:'ve:*] → [*elka:ve:*]）によって、また個々の字母の発音を表記にも反映すること（たとえば *K.d.W.* の代りに *Kadewe*）によって、タイプ Ib に属する略語に近づく。タイプ Ib に属する略語は、もともと表記法に関しても、発音に関しても、ふつうの語彙に属する語と区別できないものが多い。つまり略語をできるだけふつうの語彙に同化しようとする動きが認められるのであるが、その反面、タイプ Ia の略語の持つ文法的な貧しさを逆用し、他の品詞との自由な結合のために利用するという動きも認められるのである。

タイプ II (Kurz Wörter) について

これまでに述べたことによって、略語をめぐる主な問題は、ほとんど尽きている。これからいわゆる Kurz Wörter に属する略語について、タイプ IIa, IIb, IIc と順を追って見て行くが、略語本来の問題は IIa における文法性の喪失ということだけであり、あとは表現の節約、ことばの経済という一般的な見地から解釈のつく事柄が多い。

(a). タイプ IIa (いわゆる Kopfwörter): この例はきわめて多い。学生語の Uni (=Universität), Labor (=Laboratorium), Akku (=Akkumulator)などを挙げておこう。語群から作られた Kopfwörter の例としては Zoo (=Zoologischer Garten)を引いておこう。これらの略語の性は、ふつうは完全形のそれと等しい。しかし時として das Photo (=die Photographie), das Limo (=die Limonade)などの不一致も見られる。また Profi (<Professional) などのように、もともになっている名詞の対応する個所に存在しない母音が一層の後綴りとしてあらわれることもある。この点は最初の方(5ページ参照)で述べた人名の短縮、たとえば Dora (<Dorothea), Gabi (<Gabriele)と撥を一にしている。Kopfwörter のうちドイツ語本来の語彙に属するものは、ふつう意味上の区分に従って切られている。たとえば Ober (=Oberkellner)。しかし外来語はかならずしもそうではない。たとえば Akku の元となっているラテン語の accumulare は、ac-cumulare というのが意味上の区分であろう。ここから Schokolade を略した Schok というような語が生まれてくる。これは普通名詞の Schock と発音の点で一致してしまい、ウェイトレスのみならず、いわゆる国語浄化主義者(Puristen)たちにもショックを与えることになるのである。

(b). タイプ IIb (いわゆる Schwanzwörter): このタイプに属する略語としては [Omni]bus, [Violon]celloなどを挙げておこう。ただしこういう確立した略語と区別されるべきものは、たとえば [Schall]platte, [Ton]band など、その時々に応じて作られる略語である。これらは、何が指示されているか前後関係から明らかな場合には、規定語を省略し、基礎語のみを用いるという一般的な傾向に基づくものである。このタイプに属する略語は、タイプ IIa とくらべて、文法的に通常の語とそれほど大きい偏差は示さない(たとえば Bus はその完全形 Autobus または Auto-omnibus と同じく、文法的には男性であり、複数形は Busse である)。しかしこのグループに属する略語が外来語を除いてあまり多くないのは、規定語 + 基礎語という構成を示す複合名詞から、ひとつ、あるいはいくつかの規定語を省き、基礎語だけを残すと、けっきょく、本来意図していた意味上の分化が無に帰してしまうという、

ごく当たり前の事実によるところが大きいであろう。意味分化の役割をもある程度果たし、文法的にもある程度生命力を持つものとして、けっきょく次に述べるタイプ IIc に属する略語が、ドイツ語の語彙体系にいちばん無理なく入って行く能力と可能性とを有しているようである。

(c). タイプ IIc (いわゆる Klappwörter): このタイプに属する略語の例として O[berleitungs]bus, Inform[at]ionsbüro を挙げておこう。さらに U-Bahn などの略語も、タイプ Ia に属する略語と他の品詞との複合と考えることができるほかに、発音上の変化を度外視すれば、このタイプ IIc に属する略語のひとつとも考えられる (U[n]tergrundbahn. 8 ページ参照)。語群の中間要素がカットされた例としては Polit[isches] Büro → Politbüro, Euro[päische] [Tele]vision → Eurovision などを挙げるができる。すでに述べたように (5 ページ参照) この中間項省略は、Bewegungsgrund から Beweggrund を、また Tagschicht und Nachtschicht から Tag- und Nachtschicht を、Hallenschwimmbad から Hallenbad を作り出したドイツ語の省略法に基礎をおいている。前半部あるいはその一部が残されることによって、意味上の分化は曲りなりにも達成され、後半部の完全形あるいはその一部が残されることによって、完全形の文法的性質がまったく失われることもない。この点で、このタイプに属する略語は、規範文法の立場に立つ人びとによって白眼視されることがもっともすくなく、比較的無理なく通常の語彙に同化する可能性を有しているといえよう。

II

われわれは第一部において、現代ドイツ語において普及し、程度の差こそあれひろく用いられている略語を、その造語法と発音法とに従って整理する試みをなしてきた。砂を嚙むような整理の試みの後、われわれは今、完全形と省略形とを改めて比較し、その違いをよりひろい観点から明らかにする必要がある。この作業を通じて、われわれがすでに第一部のいくつかの場所で暗示した略語の持つ特徴、さらに略語がことば全体のなかにおいて占める位置、そこで果たしている役割などについて、いくつかの解明が得られるかもしれない。

まず Universität と Uni とを比較してみよう。もっとも単純な確認は、完全形が 5 つの綴りから成り立っているのに対し、略語形は 2 つの綴りから成り立っているということである。しかしそれにもかかわらず、両者は同一の対象を表示している。す

ると両者はシノニムであって、交換可能なのであろうか。これはもちろん事実と反する。すなわち Uni は Universität と同一の対象を表示するとともに、さらにそれ以上のものをも表示する。Wolfgang Fleischer の表現（前掲書 210 ページ）を借りると、「表示された対象への親しみ、それとの日常的かつ気の置けない接触」という色彩がそこに加わるのである。Rulon Wells もその論文 „Acronymy“ (in: For Roman Jakobson, Den Haag 1956, S. 662) において、英語における完全形と省略形を対比し、両者の差異を論じているが、その際、完全形がひとつの Morphem を有しているとすれば、その省略形はふたつの Morpheme を有している、すなわち省略形には „minus-feature“ がつけ加わるのだと言っている。たしかにドイツの高校生が、Abitur の代わりに Abi という場合、省略形の Abi は Abitur + „minus-feature“ という複合と言っているだろう。すなわち Universität と Uni, Abitur と Abi と denotativ に同一である。しかし konnotativ には同一でない、そしてこのちがいは完全形に „minus-feature“ がつけ加わることによって生じるのである。もちろん、Fleischer も指摘しているように、完全形と略語との関連が失われる場合がある。たとえば Auto がそうで、その完全形 Automobil は、もはや使われなくなっている。このような場合、完全形と略語とを上のような意味で使い分けることはできない。さらに英語の history 対 story, mistress 対 miss のように、完全形と省略形との分化が生じ、2つの異なる語が成立してしまったような場合にも、上述の使い分けは不可能である。しかし Universität と Uni, Abitur と Abi との対応において見たように、多数の略語においてはこの使い分けが可能であり、その際、短縮形の使用はただ単に表示された対象との気のおけない接触のみならず、さまざまな他の関係の表現をもなしうるのである。たとえば略語は pejorativ な表現に用いられることがある (Nazionalsozialist の略語 Nazi を参照)。これは表示された対象との気のおけない接触ということのヴァリエーションとも見られる。

さらに完全形と短縮形との直接的な比較という立場を越えて、もうすこし広い視野で短縮形の使用を見てみると、まず第一に、特殊な略語が地域語の一部をなすことがある。ベルリンで用いられる Kopfwort の Alex (*Alexanderplatz*), Klappwort の Ku-Damm (= *Kurfürstendamm*), イニシャル語の Avus (= *Automobil-Verkehrs- und Übungsstraße*) 等々はその例である。第二に略語がある社会層なり集団なりに属する人びとのことばを特徴づけるということがある。学生の間で使われるさまざまな略語 (Uni, Abi 等々) は、地域差を越えた学生語の語彙の一部を形成している。また技師などの使うさまざまな略語 (たとえば atü = *Atmosphärenüberdruck*) は、

いわゆる Fachjargon の重要な構成要素であり、学術雑誌の略称（たとえば GRM = Germanisch-Romanische Monatsschrift, DVjs = Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte）などもまた同様である。これらに関する知識の習得は、当該の専門分野を学ぶ課程の一部に組み込まれていることが多い。すくなくとも Germanistik に関してはそうで、ドイツではたいいていの大学で、初年度に「ドイツ文献学入門」(Einführung in das Studium der deutschen Philologie) というような名称のついた演習が設けられていて、そこでこういう雑誌の略称などを詰めこまれることになっているようである。

今までに見て来た略語の役割は、地域語の語彙の一部を形成する場合にせよ、ある社会層に属する人びとのいわば特殊語の一部を形成する場合にせよ、またある共通の職業、専門によって結ばれている人びとの間の Fachjargon の一部を形成する場合にせよ、いずれも分化という点で共通していた。略語はある国語の内部に、いわばひとつの垣を結びめぐらす。その垣の内部で人びとは共通の物言いによって緊密に結ばれる。しかしそれは門外漢の立入りを許さない特殊な領域をことばの中に持ち込むということでもある。略語というような、言語生活全体にとってみてあまり本質的でない部分における分化であっても、つもりつもれば言語全体にかなり大きな影響を及ぼすことが考えられる。このことの国家的規模におけるあらわれは、たとえば東西ドイツの相互拒否的併存によるドイツ語の分化にもある程度あらわれているのである。^(注2)

しかし略語には逆の反面がある。たとえば GATT (=General Agreement on Tariffs and Trade,), USA (=United States of America), UNO (=United Nations Organization) などを考えてみるとよい。いずれも英語起原のこれらの略語は、完全形とのつながりをほとんど意識させないまま、あるいはむしろそのつながりの喪失によって、英語という一国語の束縛を脱し、ヨーロッパ文化圏の共通語になっている。この語とそれによって表示される対象とは、今や具体的な一つの個別言語の媒介を経ずに、直接に結びついているのである。これは分化と正反対の動き、いわば抽象化によって個々の言語を越えた普遍的な共通語を作る動きとも言えるかもしれない。^(注3) 出発点となっている言語がもともとヨーロッパ文化圏の共通語、たとえばラテン語、ギリシャ語である場合、この傾向はさらに助長される。log (=Logarithmus), f. (=Femininum) などはその例である。この点で、すなわち、ことなる言語の人間によってひとしく理解される、しかも具体的な個々のあらわれ方は問われないという点で、この種の略語は数字に近づいてくる。たとえば2という数字は、ドイツ語では zwei、英語では two、フランス語では deux という形で具体的にあらわれる。しかし2という

数字によって表示される概念は、これらの具体的なあらわれ方と無関係に、この3つの言語集団に属する人びとによってひとしく理解されるのである。このことを反映して、とくに数字と略語とを多用して書かれる論文、たとえば数学の論文などは、具体的な個々の言語を越えて普遍的に理解される一種の共通語を形成していることがある。言語を現実の抽象によって作られたひとつの記号体系と考えるならば、略語と数字はそこからさらに抽象されたより高次の記号体系の構成要素になりうると考えられるのである。分化と統一という、一見相反するように思われる働き、しかし日常言語からのへだたりという共通点で結ばれるこの働きと並んで略語にはもうひとつの働きがある。たとえば DDT を見てみよう。だれがその完全形 *Dichlordiphenyltrichloräthan* を知っているだろうか。新しい概念を正確に詳細に名指そうとする努力は、時としてこのようなモンスターを生むのである。このような場合に極端にあらわれているように、略語は単純化、明確化に役立つ。Paul Spillner は前掲論文において、略語の持つこの働きに注目して次のように言っている：「われわれはある略語を目にする、するといわば《一目で》、意味されているものを了解できるのである」。この「一目で」という表現は、略語がドイツ語の流れの中で、いわば日本語の漢字まじりひらがな文における漢字の役割、すなわち表音文字の流れにおける表意文字の役割を時として果たしているのかもしれないということを思わせる。もちろん表音文字で表記されている通常の語も、ドイツ人の意識の中では、ふつう、まとまりのある全体としてとらえられているのであろう。本稿のはじめの部分（6 ページ参照）で挙げた長大な語、たとえば *Straßenverkehrssicherheitstag*, *Fahrpreisermäßigungsantragsformular* 等々であっても、ドイツ人には「一目で」了解できるひとつの全体的概念と感じられているのかもしれない。しかしこの全体的把握にもある限界があろう。完全形との意味上のつながりを犠牲にし、抽象化、記号化の代償を払っても、語形のより緊密な凝縮が求められる場合がやはりある。この作業がいつ始まり、またどの程度許容されるべきかは定めがたい。しかし略語の使用をプラスに転じうるひとつの局面として、それが明確化、単純化の働きを果たす場合のことを、やはり挙げておかなければならないのである。略語と他の品詞とを組み合わせ、ほとんどひとつの文章で表現されなければならないような内容を、僅々数語の中に凝縮して盛り込む新聞の見出しなどは、略語のもつこの働きを極度に生かしている例であらう。

結 語

われわれは本稿の第一部において、現代ドイツ語において普及し、程度の差こそあれひろく用いられている略語を、その造語法と発音とに従って分類することを試み、第二部ではその分類に基づき、一般的な立場から、現代ドイツ語における略語の役割について考察を試みた。最後にわれわれは主として規範的立場に立つ文法論乃至文体論の側から略語に対して浴びせられる非難について、すこし考えてみよう。

略語のさまざまな面に対して、さまざまな立場からの非難があるが、その非難はいずれも根底において、略語が具体的な個々の語から抽象された二次的な記号であることから発する、さまざまな特徴に向けられている。

まず略語が文法的にいわば死んだ語であることについての非難がある。たしかにわれわれは第一部において、もっとも抽象度の高いイニシャル語はもちろんのこと、文法的に決定力をもつ語の後半を切り捨てた *Kopfwörter* が、まさしく文法的に死んでいることを見た。しかしわれわれは、それにもかかわらずこれらの語を表記法に関しても、また少数の語においては発音に関しても、通常の語彙に属する語のそれに近づけようとする努力がなされていることをも見たのである。少数の略語においてはこの通常の語彙への接近がほぼ完全に成功し、その結果、今ではそれらが略語であることがほとんど感じられなくなったケースもある。たとえば *Radar* がそれで、その完全形 *radio detection and ranging* は、ほとんど意識されることはない。さらにわれわれはこれらの略語、タイプ Ia に属するそれでさえ、ある程度の派生能力を持ち、また完全形では考えられないような自由な結合能力を持っているのを見た（12 ページ参照）。総体的に見て略語が文法的に非生産的であることは疑いを容れない。しかしわれわれは上述のような逆の面を見逃がしてはならないのである。

略語はまた意味上の動機づけを欠く故をもって非難される。しかしこのことは、略語が日常言語からさらに抽象化された、二次的な、高度の記号体系になりうることと、表裏一体をなしているのである。

最後に、美的な観点から略語に非難を浴びせる人びとがいる。たしかに *Preußag* や *Habämfä* というたぐいの略語を、表記上からも発音上からも、美しいと感じる人間はあまりいないだろう。このためか、略語は主として機能的な場面、たとえばジャーナリズムや広告の世界でよく用いられる。しかしこのような略語を美しいと感じ、たとえば詩語として取り入れるような人間がいるかもしれない。けっきょくこれは個

人個人の評価の問題である。ちょうど今数えあげたさまざまな短所（文法的な非生産性、意味上の動機づけの喪失、通常の語と過度にかけはなれた語形）を強調して略語に断罪を下すか、あるいはさまざまな長所（意味上の分化、文法的な単純化、簡潔化、普遍的な記号体系の可能性）を強調して略語を積極的に取り入れようとするかが、個人個人の評価の問題であるのと同じように。略語自体のこのような長所短所は、相互に切り離ちがたく絡み合っている。その長所を生かし、短所の発現を最小限度に食い止めるのは、略語を可能性として与えられている言語集団の成員一人一人にかかっている。共通の仕事、関心事によって結ばれている人びとは、その Fachjargon に属する多くの略語を用いる。それに逆う人間はそのサークルにおいて目立ち、孤立する。しかし、その人間がこの略語をサークル以外の人びとに対しても用いるようなことがあれば、彼はただ単に相手に意志を伝えられないばかりか、自分を笑いものになることになる。あらゆる言語上の Extravaganz と同じく、略語を多用したいいわゆる Aküsprache (Abkürzungssprache) も、たとえ現代ドイツ語においてとどめがたくひろがる勢いを示し、ことばの有機的な生命をそこないかねないように見えても、けっきょくはそれを使用する人びとの配慮によって、ある時はその長所、ある時はその短所をあらわにしながらも、言語生活全体において相対的な安定状態を絶えずつくり続けるであろう。

注

(注 1) このことは、アルファベットの数とその組合せが有限であることによって、多くの同音異義を生み出す原因になる。たとえば U-Bahn の U と、U-Boot の U は、前者は Untergrund、後者は Untersee のイニシャルであり、両者は別物である。最近の例では ABC-Staaten (=Argentinien, Brasilien, Chile), ABC-Krieg (=Atom[bomben]-Bakterien-chemischer Krieg) に、英語から来た ABC (=American Broadcasting Company) が加わり、さらに「初歩」という意味の ABC (たとえば ABC-Buch) がまじって、かなり錯綜している。USA という国名にしても、アメリカ合衆国 (United States of America) のほかに、かつての南アフリカ連邦 (Unie van Suid-Afrika) を指していたこともある。しかしこれらの場合は前後関係から考えて、何が意味されているかを決定するのはむずかしいが、Spillner が前掲論文の中で挙げている例は、明らかに同一コンテキストに出てくる同音異義語なので、かなりの混乱が生じたと思われる。すなわちそれは RMG という略語で、これは以前、4つの異なる法律の略語として用いられたという: Rentenmehrbetragsgesetz, Reichsmietengesetz, Reichsmilitärgesetz, Reichsmittelgesetz.

(注 2) もちろんこの分化は根本的なものではない。ただ相互に了解不可能な略語の数が増して来たというほどの、ごく表面的な現象である。東ドイツできわめてひろく用いられている

略語、たとえば VEB (= *Volkseigener Betrieb*), HO (= *Handelsorganisation*) などが西ドイツでは知られていない、そしてまたその逆もあるという事実を、国語の分化という大きな問題と結びつけることは、他のさまざまなより重要な現象と関連させてからでないと、不可能であろう。

(注 3) この点で Spillner はきわめて実際的な提案をしている(前掲論文 61 ページ)。彼は同一の対象を、異なった言語の異なった略語でよぶことは、その対象が国際的な機関などである場合には望ましくない、と言っている。実際、Internationale Phonetische Gesellschaft が、フランス語ではその完全形、Association Phonétique Internationale に従って API と、英語では International Phonetic Association に従って IPA と略されること、さらにヨーロッパ経済共同体がドイツ語では Europäische Wirtschaftsgemeinschaft に従って EWG と、英語では European Economic Community に従って EEC と略されることによって、本文で述べた共通語の性格がかなり損われることは確かである。このことを防ぐため Spillner は、略語を国際的に統一することを提案している。しかしこのような統一は log, l. などの場合を除き、かなり困難であろう。略語には抽象化し記号化する傾向とともに、第一部で見たように表記、発音などの点で、ある特定の言語体系に適応しようとする傾向もあるからである。さらにまた、人為的な統一を計らなくとも、ある種の略語は自然と共通語化する。たとえばアメリカ言語学の最近の略語がほとんどそのままヨーロッパにおいて取り入れられているのもそうで、これを Amerikanismen の侵入とみなし、その駆逐をとなえるのは狭量というものであろう。これらはむしろ共通語に対するアメリカの寄与と考える方が当たっているのである。